

作品タイトル

あざらし

作者

奥山樹生

アピールポイント

北海道紋別市の景色が作品のテーマそのものを表現している点。雪に囲われ、流水を割り、のんびりとしたアザラシが取り巻く環境。それらは人生の豊かさや痛々しさ、全てを内包するような優しさ、そして厳しさを伝えてくれる。映像作品である意味合いがとても強い作品である。寒い環境の静けさと人の感情の激しさの対比で全体のテンポに緩急をつけた。

あらすじ

場所は北海道紋別市の海洋公園。お笑い芸人の卵、長谷川美知（24）と美知の元相方、速水栞（24）が海沿いのベンチで話している。美知は栞とお笑いコンビを再結成したいが、栞は芸人同士の競争に疲れており、それを拒否する。美知は悩んだ末、ピン芸人として生きていくことを考え始める。

脚本総文字数

2644文字（空白無）

人物

長谷川美知（24）：お笑い芸人の卵

速水葉（24）：美知の元相方

船員：砕氷船ガリンコ号の船員

○紋別市海洋公園 ガリニコ号乗船場

かすかに雪が降っている。

乗船場には雪が積もっている。

アザラシのキャラ「紋太」の顎部分に
穴が開いた顔はめパネルが立ち、パネ
ルには雪が付着している。

その隣の「流水観光船ガリニコ号乗船
場」という表示板のそばに橙色の砕氷
船ガリニコ号が停泊している。

船の前で船員が立っている。

船員「まもなく、ガリニコ号出発します。ご

利用の方はお急ぎください」

複数の観光客が海に広がる流水を眺め
ながら、船に乗り込んでいく。

海の見えるベンチに速水栞（24）と

長谷川美知（24）が座っている。

栞「みっちゃん、また組もう」

美知が首をゆっくり横に振る。

栞「もう一回、漫才やろうよ」

美知が首をゆっくり横に振る。

栞「二人ならすぐ売れるって」

美知が立ち上がり、「紋太」の顔はめパ
ネルに近づく。

栞「みっちゃん？」

美知は栞に微笑みかける。

美知「栞、これさ」

栞「え？」

美知「紋太の顎のところに穴開いてるよね」

栞「ま、うん。え、なに」

美知「紋太も複雑だろうな」

栞「まあ、そうだろうけど」

美知「あ、栞、野良のアザラシ見た？」

栞「え、野良？」

美知「紋別にはね、野良のアザラシがいてね」

栞「へえ」

美知「基本、海でぶかぶか浮いてるんだけど、
怪我しているとあそこの施設で保護してね」

栞「あのさ、みっちゃん」

美知「え、驚かないの？野良だよ？」

栞「(大きな声で) 驚くけどさ」

美知が驚き、頭から雪が散る。

栞「みっちゃん、お願い」

美知がうつむく。

栞が拳で自身の膝を叩く。

栞「よし」

栞が立ち上がり、美知の前に立つ。

美知「栞？」

栞「じゃ、見てて」

美知「何を？」

栞「私のお笑い」

美知「え？」

栞が目を腕で隠し、泣き真似をする。

栞「うえーん、うえーん」

栞が腕を下に下げる。

栞「したーん、したーん」

栞が腕を左右にリズムカルに振る。

栞「みぎー、ひだりー。腕の体操」

栞は腕をリズムカルに振り続けている。

近くの軒先から雪が滑り落ちる。

美知「え？」

栞「どう」

美知「どうって」

栞「笑えた？」

美知がうつむく。

栞が座りこみ、地面の雪を拳で叩く。

栞「私の笑いはこの程度なの、だめなの」

美知「だめじゃないよ」

栞「ピンじゃやってけないよー」

栞が寝転んでじたばたと動く。

栞「みっちゃんの笑いが必要なんだよー」

栞の動きで地面の雪が美知に飛び散る。4

美知「ちよ、やめて」

観光客達が栞を見ている。

美知「ちよっと、栞、恥ずかしい」

栞「二人の漫才で売りたいー」

栞はより激しくじたばたと動く。

美知「栞」

栞は動きを止めない。美知は近くの氷

柱を折り、栞に氷柱の先を向ける。

美知「栞」

栞は驚いて、動きを止める。

栞「え、ごめんなさい」

美知はベンチに座る。

美知「冗談冗談」

栞「なんだよー」

栞は美知の隣に座り、体を寄せる。

美知「でももうやらないからね、漫才」

美知が地面の雪に氷柱を突き立てる。

栞「見たでしょ、私のギャグの完成度」

美知「よかったよ、ピンでやってけるって」

栞「嘘ばかり」

美知「ごめん」

栞「養成所でウケてたのも、結局みっちゃんの書くネタが良かっただけだよ」

美知「そんなことないよ」

栞「そんなことある」

美知「ない」

栞は手についた雪を握りしめる。

栞「なかったら、羽田から飛んでこない」

美知は栞の頭の雪を優しく落とす。

美知「ごめん」

栞「謝るんじゃないなくてさ」

美知「ごめん」

栞「謝ってないか、断ってんのか」

美知が頭を下げる。

美知「ほんと、ごめんなさい」

栞「なんでやりたくないの？」

美知「それは」

栞「私の事嫌いになった？」

美知「そういうわけじゃない」

栞「じゃ、なんで？」

美知「それは」

美知は手元の雪を払い落とす。

栞「聞かないと、帰れない」

美知は「紋太」の顔はめパネルに近づ

き、表側から顔をはめる。

栞「え、みっちゃん？」

美知の背中に雪が積もっていく。

栞「みっちゃん、ほんとなにやってんの」

美知「(顔をはめたまま)アザラシになる」

栞「アザラシ？」

美知「アザラシ。しかも、保護されてるやつ」

栞「なに言ってるの」

美知「あっちにアザラシの保護施設あんのね」

栞「うん」

美知「怪我してると、治してくれて」

栞「うん」

美知「なんか一芸とか覚えさせてもらって」

栞「へえ」

美知「それで、餌もらって、撫でてもらって」

栞「それがなんなの」

美知「私は、それになる」

栞「よく分かんないけどさ」

美知がパネルから顔を外し、栞を見る。

美知「なに？」

栞「治ったら、自然に帰されたりしないの？」

美知が再びパネルに顔をうずめる。

美知「帰らない奴もいたっていいじゃん」

栞「え？」

美知「もう充分、泳いだんだから」

ガリンコ号のエンジンがかかる。

栞「確かに、色々大変だったけどさ」

美知「けど？」

栞「また頑張りたいたんだよ、二人で」

美知「何のために」

栞「だって、売りたいじゃん」

美知「だから」

美知が顔はめパネルを叩こうとして、

止め、パネルを撫でる。

パネルに付着した雪が落ちる。

美知「栞は辛くないの？」

ガリンコ号のエンジン音が上がる。

栞「辛いことなんてそりゃあるよ。でもさ」

栞が美知に近づいて、肩を掴む。

美知の顔がパネルから外れる。

ガリンコ号の汽笛が大きく響く。

美知と栞がガリンコ号を見る。

ガリンコ号は海を進み、流水にぶつかると、轟音と共に氷を割って進む。乗船している観光客達の歓声上がる。

栞「おお」

美知が栞から離れる。

美知「私はあるな風には生きれない」

栞「みっちゃんも乗ったら、きっと楽しいよ」

美知「そっちじゃない」

栞「え？」

栞がガリンコ号を見て、美知を見る。

栞「え？」

美知「私はあるな風に進めない」

栞「どうということ？」

美知がベンチに座り、胸を押さえる。

美知「仲間同士、押し退け合って」

ガリンコ号が流水を割る音。

美知「みんな、ほんとに楽しかったのかな」

美知がうずくまって、泣く。

栞の頭に雪が積もっていく。

風が吹き、地面に突き立てていた氷柱

が倒れ、折れる。栞の頭に積もった雪

が飛ぶ。栞は折れた氷柱を両方拾う。

栞「みっちゃん、見て」

葉は折れた氷柱を頭の左右につけ、頭に刺さったように見せる。

葉「(白目を剥き) 氷柱がー頭にー」

美知「何やってんの」

葉「モノボケだよ、モノボケ」

美知「モノボケ？」

葉「腕上げっから、ピン芸」

美知「葉」

葉「みっちゃん、ごめん」

葉が頭を下げて上げると、葉は鼻に氷柱を突っ込んでいる。

葉「って、鼻水凍っちゃったー」

風で雪が飛んでいく。

美知「え？」

葉「みっちゃん笑かしたら、帰るから」

美知が立ち上がり、「紋太」の顔はめパネルに表側から顔をはめる。

葉「え、みっちゃん？」

美知「じゃあ、帰れないかもね」

美知がパネルの裏で少し笑う。

(完)